

江戸しぐさの正体

教育をむしばむ偽りの伝統

原田実

日本の教育 が危ない!

虚偽を教材に道徳を説けるのか?

偽史・偽書の
専門家による、初の「江戸しぐさ」検証本

江戸しぐさの正体

教育をむしばむ偽りの伝統

原田実

星海社

52



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに 「江戸しぐさ」を読み解く三つの視点

「嘘・大げさ・紛らわしい」の見本

その昔、旧営団地下鉄の愛称・東京メトロにまだなじめなかった頃、私は上京する毎に、地下鉄の駅に張られた奇妙なポスターに目を奪われた。

それは、「江戸しぐさ」という題目で鉄道客車内での作法を描いたイラストの数々で、公共広告機構（現ACジャパン）によるマナー啓発CMだった。

私は、さっそくその「江戸しぐさ」なるものについて調べてみた。

それでわかったのは、「江戸しぐさ」がCMのために創作されたコピーではないこと、主唱者たちは江戸時代から伝わるものと主張しているが、実際の江戸時代の文化の中で使えるようなものは皆無なこと、しかし現代人のためのマナーとしては実用的なことなどであった。

つまり、現代人が現代人のために作ったマナーとしか思えないわけである。

結論から言えば、「江戸しぐさ」は歴史偽造であり、一九八〇年代に「発明」され、以降新たな創作を加えて膨らんできたものである。

それを「江戸しぐさ」の名前で広めるというのは、まさに日本広告審査機構（JARO）のCMでいう「嘘・大げさ・紛らわしい」CMの見本を、公共広告機構が作ってしまったということになる。

さて、当時すでに書店の棚には「江戸しぐさ」の入門書なるものがならんでいたのだが、私は「これだけ胡散臭いものなら、CMの影響で一時は流行ることがあっても、きつとすぐにすたれるだろう」とたかをくくっていた。

歴史捏造が、教育現場にまで浸透する危機的状况

ところが、最近になってあらためて調べたところ、「江戸しぐさ」はすたれるどころか、ますます隆盛を遂げていることが分かった。

二〇〇七年に「NPO法人江戸しぐさ」が発足して普及活動を行っていること、全国各地の教育委員会や商工会議所、自治体などで奨励されていること、さらに多くの学校で道

徳の授業に採用されていることなどがわかった。

また、教科書出版の各社も現場での動きを受けて、道徳副読本や公民教科書などで「江戸しぐさ」を好意的に扱っていることが判明した。

今年（二〇一四年）の春、文部科学省が配布した道徳教材では「江戸しぐさ」が江戸時代に実在した商いの心得として明記されている。こうなると事態はもはや洒落ではすまないだろう。

わけのわかった大人が、その胡散臭さを承知したうえで「江戸しぐさ」を学ぶのは自由である。私たちには、ヨタ話をヨタ話として楽しむ権利も許されているからだ。

しかし、文部科学省という国の機関が、義務教育の場でヨタ話を事実としておしつけるというのはどうだろうか。「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培う」（教育基本法第1章第2条）という理念を傷つけることはなほだしいものがあると言わざるを得ない。

この状況に、まずはストップをかける必要があるだろう。

教育現場への浸透を防ぎたい——私が本書を書き上げた第一の動機は、この問題意識である。

「江戸しぐさ」の作者・芝三光と、以降の展開

さて、「江戸しぐさ」の歴史を調べ続けるうちに興味がわいてきたのは、「江戸しぐさ」の自称伝承者であり、事実上の作者である芝三光^{しばみつあきら}（本名…小林和雄、一九二八？～一九九九）の人物像である。

戦時下の軍国主義と戦後の軽薄な風潮とともに嫌い、「江戸」というユートピアに生きようとした、芝の孤高の人柄には心惹かれるものがある。

しかし、残念ながらここ数年に刊行された「江戸しぐさ」入門書には芝の名前がどこにも出てこないものが多い。

今後、「江戸しぐさ」について議論するにあたって、その創始者について可能な限り明らかにしておく必要があるだろう。

また、「江戸しぐさ」講師の著書にも「江戸しぐさ」はその数八〇〇とも八〇〇〇とも言われ」（山内あやり『江戸しぐさ』恋愛かるた』二〇〇九）と、これから水増しする気満々と受け取れるような記述がみられるものもある。芝の生前には、「江戸しぐさ」の数は二〇〇前後と言われていたのだから、八〇〇〇と言えば四〇倍の水増しである。

あるいは、これから「江戸しぐさ」は過去の隠蔽と新たな捏造、そして分裂の時代に突入していくのかもしれない。

その場合、本書は「江戸しぐさ」という文化現象の発祥から二〇一四年前半までの展開を記録した文献としての史料価値も帯びてくるはずだ。

また、芝の創意による「江戸しぐさ」は、弟子の越川禮子と日本現在新聞社の桐山勝とこしかわいこという二人の人材を得たことで爆発的に普及していく。普及過程における「江戸しぐさ」の変容と、その浸透の歴史も、できる限り検証しておく必要がある。

「江戸しぐさ」の誕生と普及の過程を明らかにすること、それが本書執筆の第二の動機である。

オカルト物件としての「江戸しぐさ」

また、「江戸しぐさ」の史料をあさっていくうちに、私はこれが単なる歴史偽造ではないことにも気付いた。

「江戸しぐさ」の伝承について、明治政府が「江戸しぐさ」を弾圧した後その弾圧自体も隠蔽した（つまり、実在の証拠が提示できないのを権力のしわざにする）、というエピソードが

あるが、これは陰謀論の構造を持っている。

さらに、地震予知など超能力の要素をも含んでおり、そういった意味では「江戸しぐさ」は立派なおカルト物件なのである。

そこで本書では、他のおカルト物件との類似にも注目しつつ、「江戸しぐさ」の形成と流布の構造について分析を加えることにした。

おカルトは、楽しみ方をわきまえておかないと、高い学歴を持つ人間も簡単に取り込んでしまう。そのような、一種の魅力を備えているのである。そして、調べを進めるうちに、「江戸しぐさ」はおカルトとして、巧妙で強靱であることも分かってきた。

おカルトとしての「江戸しぐさ」を分析し、トンデモが社会に受け容れられる理由に迫ること。これが、本書を執筆した第三の動機である。

このように、「江戸しぐさ」は様々な角度で分析・検証すべき問題を含んでいる。

本書が、「江戸しぐさ」の諸相を知り、考えるよすがとなれば幸いである。

原田実

目次

はじめに 「江戸しぐさ」を読み解く三つの視点 3

「嘘・大げさ・紛らわしい」の見本 3

歴史捏造が、教育現場にまで浸透する危機的状况 4

「江戸しぐさ」の作者・芝三光と、以降の展開 6

オカルト物件としての「江戸しぐさ」 7

第二章 「江戸しぐさ」を概観する 17

三〇〇年の太平を支えた町人哲学？ 18

社員研修・市民講座から学校教育まで 19

普及に手を貸すマスコミ 21

文部科学省の教材にまで登場 22

恐怖の「江戸っ子狩り」と隠れ江戸っ子の苦難 24

「しぐさ」を「思草」と書く意味 28

一九八〇年代、『読売新聞』に突然現れた「江戸しぐさ」 30
具体化してゆく「江戸しぐさ」 32

個々の「江戸しぐさ」を解剖する 40

「傘かしげ」はありえたか 40

威嚇しあう「肩引き」 43

海軍式の「蟹歩き」 45

電車が走る江戸の街 47

江戸時代の例も挙げられない「仁王しぐさ」 51

身分社会で平等主義？ 52

「三脱の教え」は身分社会では不要 54

時間泥棒に支配された江戸 57

オランダ人の見た「時間にルーズな日本人」 60

芝の個人的感覚の産物 63

江戸の往來の風物詩も否定 65

「横切りしぐさ」 67

「駕籠とめしぐさ」 69

江戸に嫌煙権はありえたか？ 71

トマトの食用は近代以降 75

「じっくりコトコト」は現代的 76

昆布は江戸ではなじみがなかった 78

野菜スープ健康法の亡霊 79

心に肥やしを撒く？ 81

「こやし」Ⅱ「人糞尿」 83

チョコレート入りのパン？ 86

真夏の江戸で氷は手に入ったか 88

江戸っ子はバナナが好物？ 91

江戸庶民のトロの食べ方 92

現実の江戸の「町人哲学」は「心学」だった 94

第三章 「江戸しぐさ」の展開 越川禮子と桐山勝 97

当初の関心は高齢者問題 99

アメリカ公民権運動にのめりこむ 101

アメリカ公民権運動から「江戸しぐさ」へ 104

芝三光の晩年を看取る 106

「江戸しぐさ」伝授は老人の愚痴 108

先住民としての「江戸っ子」 110

「NPO法人江戸しぐさ」設立への道 112

集金システムとしての講師認定制度 114

第四章 「江戸しぐさ」の誕生 創始者・芝三光と反骨の生涯 119

「江戸しぐさ」創始者は芝三光 120

一九二二年生まれ説と一九二八年生まれ説 121

G H Q 伝説はなぜ生まれたか 124

人間チェック・テストに合格しなければ「江戸っ子」になれない？ 128

江戸講の正体は米軍将校クラブ？ 129

マッカーサー顕彰運動 132

「江戸しぐさ」のベースは英米式マナー 133

華族の庶子というホラ話 135

昭和へのノスタルジーとしての「江戸しぐさ」 137

芝の夢想した「反現実のユートピア」 139

自己啓発の元祖・一九七〇年代ビジネス書の影響 142

オカルトとしての「江戸しぐさ」 偽史が教育をむしばむ

157

芝は「江戸しぐさ」の一人歩きを恐れていた 144

和城流「江戸しぐさ」と「NPO法人江戸しぐさ」 147

反骨の産物が権力に都合がいい物となる皮肉 150

自民党Ⅱ安倍晋三ラインによる教育現場への浸透 152

「江戸しぐさ」浸透の構造を分析する 158

江戸っ子は関東大震災を予知した？ 159

「ロク」とは科学的推論？ 161

偽史『東日流外三郡誌』との類似性 164

偽史としてより巧妙な「江戸しぐさ」 165

証拠の欠落が強みだと悟ったUFOカルト 169

一切証拠を示さないラエリアン・ムーブメント 170

ネイティブ・アメリカンの長老を捏造——カスターネダ事件 171

「江戸しぐさ」教育を弾劾する 歴史教育、そして歴史学の敗北

「すべてが嘘とはいえない」論法は無意味 174

「専門家」の対応が事態をこじらせる 176

専門家が社会的責任を果たさなかった帰結 178

高学歴者もオカルトにはまる 181

企業経営者・コンサルタントのオカルト嗜好 183

オカルト好きコンサルの代表・船井幸雄 184

教育に使ってはいけない、偽の歴史 192

虚偽を根拠に「道徳」を説けるのか 194

科学界の批判が食い止めた「水からの伝言」 195

教育現場に蔓延する奇妙な話 196

教科書検定制度の無力 197

凶悪犯罪は江戸時代にもあった 199

いじめや体罰も江戸時代からあった 201

現状否定のために過去を美化することの無意味さ 202

「江戸しぐさ」と同和教育は両立できるか？ 203

「歴史教育の敗北」と「歴史学の敗北」 205

歴史学も無傷ではられない 208

反論や疑問を封じる狭量さ 209

「現実逃避」から生まれた「江戸しぐさ」 211

「江戸しぐさ」を教育から追放するために 212

おわりに 「江戸しぐさ」は最後の歴史捏造ではない 217

「江戸しぐさ」はUFOよりもあり得ない 218

芝三光のオリジナリティ 219

「江戸しぐさ」は最後の歴史捏造ではない 220

日本橋

太平無事客
行盡幾山川
城上慶雲靜
楊頭人氣煥
紅衣常絡繹
金轡每駢闐
題柱知何意
從來元在天
山崎闇奇

「江戸しぐさ」を概観する

第一章



三〇〇年の太平を支えた町人哲学？

「江戸しぐさ」という言葉を初めて聞いた人はどのような意味だと思うだろうか？

私は最初、近世の江戸の住人たちが日常的に行っていた動作（しぐさ）の意味だと思った。しかし、少し調べただけでこの認識は誤っていたことがわかった。「江戸しぐさ」は現代人の造語だったのである。

現在、「江戸しぐさ」普及の中心的役割を担っている「NPO法人江戸しぐさ」という団体のHPでは、「江戸しぐさ」を次のように定義している。

「江戸しぐさ」は、江戸商人のリーダーたちが築き上げた、上に立つ者の行動哲学です。よき商人として、いかに生きるべきかという商人道で、人間関係を円滑にするための知恵でもありました。江戸時代は、二六〇年以上もの間、戦争のない平和な時代が続きました。その平和な安心な社会を支えたのが「江戸しぐさ」という人づきあい、共生の知恵です。

つまり、「江戸しぐさ」は漠然とした動作の意味ではなく「行動哲学」であり「商人道」

→ 『江戸名所図絵』日本橋より。幕末の町人人口は五十四万人に達した。武士なども含めた総人口は、一八世紀には一〇〇万人を超えたと考えられる研究者もいる。一〇〇万人を超えていたとするならば、当時世界最大の人口を誇る都市ということになる。「江戸しぐさ」伝承譚にあるような江戸っ子虐殺を行うのは至難の業だっただろう。

であり「共生の知恵」だというわけである。ちなみに「江戸しぐさ」の「しぐさ」に漢字を当てる場合は一般的な「仕草」ではなく特に「思草」を用いるという。

もちろん江戸商人の行動哲学なるものが成文化されて残っていたなら、それ自体は文化史・思想史の立場から貴重な資料と言えるだろう。

しかし、「NPO法人江戸しぐさ」でも認めていることだが、「江戸しぐさ」はすべて口伝であり、それに関する古い文献や実在の証拠は一切残っていないという。つまり「江戸しぐさ」が江戸時代の平和をもたらしたという同法人の主張も、裏付ける根拠はない。

だが、一方で企業の社員研修や自治体・青年会議所・大学などで主催する市民講座で「江戸しぐさ」が教材としてもてはやされているのも事実である。

また、最近では、公教育の現場でも「江戸しぐさ」は積極的に導入されている。

社員研修・市民講座から学校教育まで

従業員研修に「江戸しぐさ」を用いていることを公表している企業は多い。

東京ディズニーランド、東京ディズニーシーなどの運営で有名な株式会社オリエンタルランドや、関東以北の高速道路を管理運営するNEXCO東日本（東日本高速道路株式会社）

などがその代表である。

特にNEXCO東日本では、東北自動車道羽生パーキングエリアに「鬼平江戸処」というテーマパークを設け、そこで従業員だけでなく利用者にも「江戸しぐさ」について知ってもらうための講習などを行なっている。

ちなみに「鬼平江戸処」では池波正太郎いけなみしょうたろうの『鬼平犯科帳おにへいはんかちやう』の世界を再現したと謳っているが、池波の作品には「江戸しぐさ」はまったく登場しない。

また、主に新潟県内で活動する「新潟江戸しぐさ研究会」や福岡市を拠点に九州一円で活動する「ゆなさ塾」など「江戸しぐさ」に基づく社員研修プログラムを作成している企業・団体もあり、「江戸しぐさ」が地方にまで浸透していることがうかがえる。

学校教科書や副読本にも「江戸しぐさ」は登場する。たとえば育鵬社刊の教科書『中学社会 新しいみんなの公民』では平成二四年度（二〇一二）版から「江戸しぐさ」というコラムを設け、その中で実際の江戸時代の習慣として肯定的に扱っている。

「江戸しぐさ」を教育現場に普及した団体として代表的なものには、全国小中高の教師合わせて数万名もの会員数を誇るTOS S（教育技術の法則化運動）がある。TOS Sでは「江戸しぐさ」を導入した授業の進行例をウェブ上に公開している。

自治体や教育委員会として「江戸しぐさ」を奨励した地域も日本各地にあり、それらの地域の学校ではT O S Sの会員ではない教師も、ウェブで公開された授業例を参考にしていると見てよいだろう。

普及に手を貸すマスコミ

また、マスコミも「江戸しぐさ」普及に一役買っている。

テレビにおいては、NHKのローカル番組（東京以外の地方支局含む）やフジテレビ系『テレビ寺子屋』などで「江戸しぐさ」がしばしばとりあげられている。

新聞に関していうと、『朝日新聞』では夕刊生活情報面マリオンで「暮らしうるおう江戸しぐさ」というコラムが二〇〇六年から二〇〇七年にかけて連載されていた（後に朝日新聞社から単行本化）。

朝日に限らず、読売新聞・産経新聞・毎日新聞などの全国紙本紙、新聞社発行の雑誌では『日経ビジネス』などで「江戸しぐさ」に関する記事やコラムが掲載されたことがあった。

もちろんいずれも「江戸しぐさ」に好意的な内容である。

地方紙で「江戸しぐさ」普及に熱心なのは、公称八〇万部以上と九州地方でのトップシェアを誇る『西日本新聞』である。

同紙では現在、毎月二回「おもてなし塾 マンガで江戸しぐさ」というコーナーを連載している。

また「江戸しぐさ」普及活動の記事も積極的に掲載している。たとえば最近では、二〇一四年六月二三日付の「江戸しぐさを教師と親学ぶ 篠栗町で300人」という記事がある。（内容は小学校PTAによる勉強会に関するもの。篠栗町は福岡県粕屋郡にある）。

本書の検討を読んでいたければ、いや、その伝来譚のさわりの部分だけでもおかしいと感じるはずの「江戸しぐさ」だが、NHKや主要新聞の状況を見ると、「報道とは一体なんなのか」と暗澹たる気持ちになってしまう。

文部科学省の教材にまで登場

しかし、もともと危惧すべきは教育の現場における浸透である。

文部科学省では第二次安倍政権下での教育改革を受けて、平成二六年度から新しい道徳教材として『私たちの道徳』を作成した。

その小学校5・6年生用では、「礼儀正しく真心をもって 江戸しぐさに学ぼう」という小見出しで「江戸しぐさ」を正式に教材として用いている。ちなみに道徳は現状の学校制度では正式な教科ではないため、検定済教科書は存在しないが、そのために文部科学省が統一の教材を作り、教科書出版社がその副読本を教育現場に向けて販売するという形式をとっている。

道徳教材としての「江戸しぐさ」導入はここ最近で始まったものではなく、小学校の道徳用副読本では東京書籍『明日をめざして』、学校図書『かがやけ みらい』が早くから「江戸しぐさ」を導入していた。

また、中学校についても、日本標準『中学校道徳副読本1年 みんなで生き方を考える道徳』、学研『中学生の道徳1年 かけがえのないきみだから』、日本文教出版『中学校道徳 あすを生きる』、正進社『中学生 キラリ☆道徳』などの道徳副読本が「江戸しぐさ」をとりいれた授業に対応できる内容になっている。

さらに公民教科書では、育鵬社の『中学社会 新しいみんなの公民』が平成24年度版からコラムとして「江戸しぐさ」を好意的にとりあげている。

ちなみに、沖縄県石垣市・与那国町・竹富町で構成する教科用図書八重山地区採択協議会では、二〇一一年夏に中学公民教科書としてこの育鵬社版を採択したが、竹富町がそれを拒否して他社の教科書を採用したため、竹富町の決定を尊重する沖縄県教育委員会と採択協議会の決定を後押しする文部科学省まで巻き込んだ騒動になった（二〇一四年、沖縄県教委が竹富町の採択協議会からの離脱を認め文部科学省が違法確認訴訟断念という形で一応決着）。これらの教科書・教材・授業例では、いずれも「江戸しぐさ」が江戸時代から現代まで伝わったのは自明のこととして扱われており、実際には江戸時代のものともみなす根拠がないことには触れられていない。

すでに平成二四年度の時点で公民の教科書検定にパスした上、平成二六年度からの文部科学省の道徳教材への正式採用で、「江戸しぐさ」はいわばお上のお墨付きとなった、ということになる。

恐怖の「江戸っ子狩り」と隠れ江戸っ子の苦難

さて、「江戸しぐさ」は江戸の商人の間では広く共有された行動哲学だったという。しかし、最近までその内容があまり知られていなかったことも事実である。では、なぜ「江戸

しぐさ」はつい最近まで忘れられていたのだろうか。

「NPO法人江戸しぐさ」の越川禮子氏によると、その原因は、幕末・明治期に薩長勢力が行った「江戸っ子狩り」に求められる。

江戸っ子を一部の官軍は目の色を変えて追い回した。「江戸っ子狩り」は嵐のように吹き荒れた。摘発の目安は「江戸しぐさ」。ことに女、子どもが狙われた。私たちの目にはふれないが、ベトナムのソンミ村、アメリカネイティブのウーンデッドニーの殺戮にも匹敵するほどの血が流れたという話もあながち嘘ではないかもしれない。それらは、史実の記録はおろか、小説にも書かれていないが」（越川禮子『商人道「江戸しぐさ」の知恵袋』一五七～一五八頁）

この「江戸っ子狩り」の魔手を逃れるため、多くの江戸っ子が地方に逃れて隠れ江戸っ子になったという。その江戸っ子脱出手引きしたのは幕臣の勝海舟で、両国から船を出して武蔵や上総に何万という人を送った。彼らは近くは神奈川、埼玉、遠くは北海道の函館まで逃れて「江戸しぐさ」を伝える江戸講の組織を維持し続けていた。

また、「江戸しぐさ」はもともと口伝で書き物を残すことを禁じられていた上に、江戸っ

子たちが江戸に関する記録を薩長勢力にわたすことをこぼんですべて焼き捨ててしまった。そのため、「江戸しぐさ」に関するわずかな覚書まで失われたのだという。

薩長の子孫からしてみれば、濡れ衣もいいところである。また、勝海舟の履歴にもそのような事実はない。

ともあれ、「江戸しぐさ」は勝の尽力で命脈を保つことができたのだという。

ところが、一九三八年施行の国家総動員法で集会が禁じられたため、江戸講はその組織を維持できなくなった。さらに多くの隠れ江戸っ子が戦争に駆り出されて帰ってこなかったため、地方の江戸講での伝承は絶えてしまった、というわけである。

越川氏の言うウーンデッド・ニーは一八九〇年、第7騎兵隊が行なったスー族虐殺の舞台となったサウスダコタ州の地名である。最近では、映画『アイアンマン3』（二〇一三）における悪役マンダリンの反米演説の中でも触れられていた。その犠牲者数は、多く見積もって約三〇〇人とされる。

ソシミ村は一九六八年、ベトコン追討の名目で米軍が非武装の民間人五〇四人を殺害した場所である。この二つの地名は、アメリカ合衆国の負の側面を示す例として、七〇〃八

○年代のアメリカ公民権運動の中でよく並べて言及された。

とはいえ、どちらの事件も凄惨ではあるが犠牲者は数百人単位である。一方、幕末期における江戸町方の人口は新政府による調査で町奉行・寺社奉行支配合わせて五四万人近かったとされる。そのうちの数百人、それも伝承の担い手ではない女子供を主に殺害することで、広く共有された伝承が絶えるということがありうるだろうか。

また、「江戸っ子狩り」を記した文献は、古文書や記録どころか小説にさえないことを「江戸しぐさ」の伝承者という人物さえ認めている。証拠が残っていないのは虐殺のため、その虐殺を記した証拠も残っていない、これではまるで話にならないではないか。

ちなみに事実としては、幕末・明治初期における江戸町方の記録は大量に残っており、意図的に記録が隠滅された形跡はない。

また、新政府は一八六八年五月の江戸開城後、同年七月に上野戦争で彰義隊ら旧幕府勢力を打ち破るまではむしろ旧幕府勢力による略奪や兵士への暴行や殺害に悩まされており、上野戦争後は長岡・会津・箱館政府との戦いに相次いで兵を繰り出さなければならなかったため、「江戸っ子狩り」など行える余裕はなかった。

「江戸しぐさ」伝来譚における「江戸っ子狩り」の話は眉唾物とみてよいだろう。

「しぐさ」を「思草」と書く意味

ところで先述のように「江戸しぐさ」は「江戸思草」とも表記されるわけだが、この「思草」とはどういう意味か。

「江戸しぐさ」に関する初期の文献である越川禮子氏の著書『江戸の繁盛しぐさ』によると、「しぐさ」とは心が外に出たもの、すなわち親きようだいからのインプリンディング（刷り込み）で、その人に刷り込まれた考え方が顔の表情やくせになって体の表面に現れたものだという。

つまり「しぐさ」の根底にはその人の心、思いがある。だからこそ「仕草」の前に「思草」があるのだという。

「江戸しぐさ」は、そのインプリンティングを通して親から子へ、子から孫へと口伝え、目伝えに受け継がれてきた。また、その内容を書き物にすると俗化してしまうので、江戸っ子たちはあえて書物化、文章化することはなかった。だから「江戸しぐさ」の文献は残らなかったという（「江戸しぐさ」の文献が残っていない理由については別の説明もあるが、その点は後述）。

ちなみに、思草という字面の言葉は実際に近世以前の古語にある。しかし、それは「おもひぐさ」と訓じられ、物思いの原因となる物事の意味、もしくは植物の名（諸説あるが通常はナンバンギセルの意味とされる）を示す歌言葉である。おそらく「江戸しぐさ」と思草には関係はないだろう。第一、「しぐさ」に「思草」を当てるという発想自体が古典で思草という言葉に馴染んでいる人からは出てきそうにない。つまりは古典との馴染みが薄い現代人によって造られた表記であることは明らかである。

もつとも、「江戸しぐさ」の表記について考証すること自体、実はあまり意味がない話だったりする。というのも「江戸しぐさ」という言葉自体が現代人のネーミングで生じた言葉だったからである（第三章参照）。ちなみに、「江戸しぐさ」はもともと「商人しぐさ」「繁盛しぐさ」と呼ばれたという説もあるが、これらは当初、「江戸しぐさ」の同義語として扱われていた言葉であり「江戸しぐさ」同様、現代の造語とみてよいだろう。

現在、「江戸しぐさ」という語は三件（出願中を含め四件）商標登録されているが、それらがあっさり認可されたのも、この言葉が歴史的背景や普遍性を持たない言葉だったからこそだろう。

一九八〇年代、『読売新聞』に突然現れた「江戸しぐさ」

「江戸しぐさ」という言葉が文献上、最初に現れたのは一九八一年八月二八日付『読売新聞』の「編集手帳」においてである。

ただし、その中では「江戸の良さを見なおす会」の江戸文化研究について、江戸町人の独特の振りである「江戸しぐさ」も研究テーマの一つ、という扱いになっている。

その後、一九八三年二月二三日付同紙「編集手帳」でも、「江戸の良さを見なおす会」の芝三光という人物が、「江戸町民のしぐさ」を「文献に当たったり、古老から聞き出したりして掘り起こす」作業をしていること、その「江戸しぐさ」を子供たちに演技してもらおうことで、子供たちの間に新しいマナーが生まれるのではないかと期待していることなどが記されている。

また、一九八三年五月三一日付、同紙都民版朝刊には『「江戸しぐさ」に学ぼう』という記事が掲載されている。その中では、芝を代表とする「江戸の良さを見なおす会」が「文献にあたったり古老に尋ねたりして」収集した「江戸しぐさ」を高校生に実演させたビデオを作成していることが報じられている。ただし、記

編集手帳

「江戸の良さを
見なおす会」と
いうのがある、
と聞いた。もう
十年以上も続い
ているというか
ら、昨今の江

戸ものブームに乘っ
ってできた集まりではあ
るまい◆大学の先生や医
師、サラリーマンや主婦
などの「講座」が、江戸
文化について自由に意見
を交換し合っている会の
ようだ。「江戸しぐさ」も
研究テーマの一つ、とい
う。しぐさは①やり方。
しゅちの身ぶり。俳優の
動作。所作（＝岩波国語
辞典）だが、江戸の町
人の間には独特の振りが
あったとか◆例えば「お
愛想目つき」。店に客が
やってくる。お目当ての

『読売新聞』1981
年8月28日付朝刊
より。好意的にとり
あげる記事である。

事によるとその内容はあいさつの仕方などで、現在の「江戸しぐさ」と同じものではない。と、店の主人は「どうもおあいにくさまで……」と言うだけではなくて、目をしょぼしょぼさせた。相手の気持ちがよくわかる、と態度に表す、つまり「しぐさ」だ。◆雨の日。相手に迷惑が及ばぬように、すれ違う時には自分のカサを一方に傾けたり、すばめたりする。これが「カサかたげ」。しつけの厳しいノレン大事の店では今でもこの種の教育を店員にしているという。要は、繊細な心配りをすることだが、大半のサービスマンでこんな美風はすたれた。◆無表情。事務的。その最たる例が、タクシ

の乗務員諸氏だろう。行く先も聞かないうちから走り出す。自分好みのカー・ラジオはつけっ放し。小銭を用意していないのは客の落ち度といわんばかり。例外は無論あるが、そういう體格な態度に接する方が、まだ多い。◆大都市で、タクシ

ーの運賃値上げが決まっ

品がない。と、店の主人は「どうもおあいにくさまで……」と言うだけではなくて、目をしょぼしょぼさせた。相手の気持ちがよくわかる、と態度に表す、つまり「しぐさ」だ。◆雨の日。相手に迷惑が及ばぬように、すれ違う時には自分のカサを一方に傾けたり、すばめたりする。これが「カサかたげ」。しつけの厳しいノレン大事の店では今でもこの種の教育を店員にしているという。要は、繊細な心配りをすることだが、大半のサービスマンでこんな美風はすたれた。◆無表情。事務的。その最たる例が、タクシ

の乗務員諸氏だろう。行く先も聞かないうちから走り出す。自分好みのカー・ラジオはつけっ放し。小銭を用意していないのは客の落ち度といわんばかり。例外は無論あるが、そういう體格な態度に接する方が、まだ多い。◆大都市で、タクシ

ーの運賃値上げが決まっ

でしょう。

以上、芝が「江戸しぐさ」を説き始めた当初、普及の主な舞台は『読売新聞』だったことがうかがえる。

具体化してゆく「江戸しぐさ」

一方でこの時期の芝は、講演や公開講座においても、その江戸文化研究の成果を世に問うていた。

たとえば、一九八四年度の跡見学園女子大学における公開講座において芝が「はたらく——江戸の職人の世界」という題で講演した内容は同講座の司会を担当した同大学教員の藤崎康彦氏によるレポートが残っている（藤崎康彦『文化と型』再考——芝三光氏講義『はたらく』へのコメント——『フォーラム』一九八五年三月号）。

それによると、江戸の文化が断絶したのは「新政府のもとで江戸っ子達は自らを語ろうとせず時代の変化の中で、いわば世の中からひきこもってしまった」た

編集手帳

江戸時代の庶民

は、他人とケンカになっても肩から上には決して手をあげてはならぬというルールを守った。

足を踏む。と、踏まれた方もあやまった◆そんな「江戸町民のしぐさ」を文獻に当たったり、古老から聞き出したりして掘り起こす。それらをバザに據る。もう百本に近いという。東京・目黒の社会教育団体「江戸の良きを見直す会」の芝三光さんから「中学生が荒れますが、われわれの資料をお役に立てたい」と電話があった◆芝さんのひいじいさんは江戸・神田

『読売新聞』1983年2月23日付朝刊より。記事によると、芝から売り込みの電話があったという。

めと説明されており、この時期にはまだ、先述の「江戸っ子狩り」の設定ができていなかったことがうかがえる。

一九八六年、「江戸の良さを見なおす会」の著者名義で「江戸しぐさ」に関する最初の書籍『今こそ江戸しぐさ第一步』が刊行される。もともとこの書籍、「江戸しぐさ」の効能を謳ったり、芝と思われる著者の随想を語ったりするばかりで、「江戸しぐさ」の内容や伝来の経緯などは一切語られないという不思議な本である。興味深いのはこの本の「あとがき」にある次のくだりである。

講演会の域を出なかった『江戸の良さを見なおす会』にも、江戸しぐさの口
　　ルプレイを始めようという機運が出てきました。頭でなく、体で覚えなくては意味がないと主張し、体験学習会を開くのが宿願だった私には嬉しいことでした。

（『今こそ江戸しぐさ第一步』二三三頁）

同じ本の一四八頁には「次巻予告・日常生活の中の『江戸しぐさ』の一部」として大きな荷物を持ってすれちがう、後から来た人のために座席をつめる、電話

で寺子屋を開いていた。
読み・書き・そろばんではなくて「見る・聞く・話す」を教えるのが「江戸寺子屋」のしきたりだった。学問も大事だが、人と人とのつき合い方を教える。興味を持って芝さんが調べ始めてから十五年になる◆「で、どうしようか。江戸のルール・を、今の子供たちにも話したら……。クラブ活動なんかを通して、子供たちにも演技してもらおう。存外、面白がってくれるんじゃないでしょうか。子供たち同士に新しいマナーができそうな気がするんです◆実は随分前になるが江戸しぐさについて、この欄で書いたことがある。芝さんは、学校にも電話をかけたという。「今、忙しいんです」「進学期で子供たちはいら立っていますから」「江戸？ 封建的ですか」と、ろくに話も聞いてくれないところばかりだった◆「対話がない。いや、先生と子供

をとる、といったシチュエーションでのロールプレイを撮影したと思われる写真がおさめられている。

どうやらこの時点では続編として「江戸しぐさ」のロールプレイをテーマとする本を構想してはいたらしい。

しかし、芝が主宰しているはずの「江戸の良さを見なおす会」がこの直前まで講演会の域を出なかったということは「江戸しぐさ」の内容もまだ固まっていなかったことがうかがえる。おそらくは高校生のビデオ撮影などで積み重ねた試行錯誤がようやく形になってきたということであろうか。

一九八〇年代の史料による限り、「江戸しぐさ」というのはその時期に突然、特定の人物（もしくは、その人物が主宰する団体）によって提唱されはじめたもので、その内容も、その人物の研究の成果として提出されたもののようである。

それでは、現在の形の「江戸しぐさ」ができあがったのはいつ頃からなのか。

それを明らかにするには、一九八〇年代における提唱者・芝三光と現在の形の「江戸しぐさ」を復興させた第一の功労者・越川禮子



江戸の良さを見なおす会『今こそ江戸しぐさ 第一歩』（1986年、稜北出版）。表紙の人々は「この本づくりに関係した人々」だという。謎のセンスだ。

氏という二人の人物について調べる必要がある。

芝と越川の二人については、本書第三章及び第四章でじっくりと追うことにして、次章ではまず、個々の「江戸しぐさ」がいかにあり得ないものであり、その創作の背景に何があったのかを検証していくこととしたい。

「ㄥ」登録商標としての「江戸しぐさ」

現在、「江戸しぐさ」という語の登録商標は3件認可済み、1件出願中である。

★2008年3月出願、同年9月認可、

適用範囲 「焼のり、干しのり、味付けのり」（商品名）

★2008年9月出願、2009年6月認可。

適用範囲 「飲食物の提供」（東京神田にある居酒屋「江戸しぐさ」の屋号）

★2009年1月出願、同年10月認可。

適用範囲は次の通り

「紙類、文房具類、印刷物」「セミナーの企画・運営又は開催、書籍の制作、電子出版物の提供、教育・文化・娯楽・スポーツ用ビデオの制作（映画・放送番組・広告用のものを除く。）」

〈NPO法人江戸しぐさ〉

★2014年2月出願、現在審査中。

適用範囲は次の通り

「広告業、経営の診断又は経営に関する助言、市場調査又は分析、商品の販売に関する情報の提供、ホテルの事業の管理、広告用具の貸与、新聞記事情報の提供、インターネットによる広告、雑誌による広告、新聞による広告、テレビジョンによる広告、ラジオによる広告、屋外広告物による広告、街頭及び店頭における広告、物の配布商品の実演による広告、ダイレクトメールによる広告、広告宣伝物の企画及び制作、広告の企画、広告のための商品展示会・商品見本市の企画又は運営、広告文の作成、ショーウインドーの装飾、広告に関する情報の提供、広告に関するコンサルティング及び情報の提供、広告・事業の管理及び運営並びに一般事務処理に関する情報の提供（オンライン

ンによるものを含む。」「企画旅行の実施、旅行者の案内、旅行に関する契約（宿泊に関するものを除く。）の代理・媒介又は取次ぎ、企画旅行に関する情報の提供、ツアー旅行及び巡航の手配、観光ツアーの手配及び予約」（株式会社アートプランナース・取締役がNPO法人江戸しぐさ理事）

●「江戸しぐさ」は「江戸商人の行動哲学」と定義されている

●企業や教育現場に広く取り入れられている

●しかし、その「発明」は一九八〇年代を遡らないと考えられる

つまり、「江戸しぐさ」は江戸時代に由来するものではなく、現代人によって創作されたものである

代の御書
 名の巻
 検証

吃の巻

四

致

検証「江戸しぐさ」 パラレルワールドの中の「江戸」

第二章

花里

個々の「江戸しぐさ」を解剖する

本章では、「江戸しぐさ」の中でも代表的とされるものについて、個別の検討を行っている。
きたい。

序章で述べた通り、「江戸しぐさ」は一九八〇年代に提唱されはじめたものであり、芝三光をはじめとする現代人の創作である。

ゆえに、実際の江戸時代の風俗とかけ離れていたり、江戸時代においては使う意味がない、或いは使うと逆に不利益を被りそうなもののオンパレードである。

けれども、逆に現代のマナーとして考えると理屈が通っていたりするものもある。

個々の「江戸しぐさ」の検討を通じて、それらが生み出された背景を考えてみたい。

「傘かしげ」はありえたか

「江戸しぐさ」を代表する三大しぐさは「傘かしげ」「肩引き」「こぶし腰浮かせ」だと言われている。

その「傘かしげ」について、『商人道「江戸しぐさ」の知恵袋』（以下『商人道』）では次のように説明される。

⇒

一寸子花里『文学万代の宝』より。弘化年間（一八四四～一八四八）頃のもの。なかなか真面目に勉強しない子供たちの姿が面白い。この錦絵が描かれた頃、江戸における就学率は七〇%を超えていたと言われる。「町人哲学」であったはずの「江戸しぐさ」関連の文献が全く残っていないのは、どう考えても不可解だ。

雨や雪の日、道路ですれ違うとき、相手も自分も傘を外側に傾けて、一瞬、共有の空間をつくり、さっとすれ違う。お互いの体に雨や雪のしずくがかからないようにするとともに、ぶつかって傘を破らないようにする実利的な意味も含んでいた

『商人道』 九三頁

しかし、これは誤解に基づく創作である。

浮世絵の題材や歌舞伎の小道具に傘がよく使われること、時代劇などで浪人の内職としてよく傘張りが出てくることから誤解しがちだが、江戸では差して使う和傘（唐傘）の普及は京や大坂に比べて遅れていたのだ。

江戸時代も末期の天保年間（一八三〇～一八四四）頃には江戸でも和傘の普及が進むが、それでも贅沢品という性格が強かった。江戸っ子たちは雨具として、主に頭にかぶる笠や蓑みのを用いていたのである。

江戸でも大店の商家では、急な雨の際に客に傘を貸し出すサービスをすることもあったが、これはその傘に入った屋号を目立たせることによる宣伝という意味が大きかった。

浮世絵や歌舞伎に傘が出てくるのは贅沢品ゆえで、今でいえば雑誌グラビアや映画でブランド品が使われるようなものである。

また、下級武士の内職に傘張りが好まれたのも、贅沢品に関わるゆえに他の内職に比べて実入りがいいからである。

したがって、江戸で傘を差したものの同士がすれ違うという状況が、特殊なしぐさを必要とするほど頻繁だったかどうかには疑問がある。

また、傘かしげは相手も同じ動作をするという暗黙の了解によって成り立っている（そうでなければ、かしげた側が上からの雨と相手の傘からの雨を同時にかぶることになる）。それなら一方が立ち止まって道を譲るなり、傘をかしげるのではなくすばめるなりしてぶつかるのを避けた方が賢明である。

そして、和傘はスプリングが入った洋傘に比べ、すばめたまま手で固定するのが楽な構造になっているのだ。

江戸時代末の浮世絵師・歌川広重（一七九七～一八五八）が晩年に描いた錦絵『名所江戸百景』では、雨の中、蓑笠を着た人に混ざって和傘を差す人物も登場する。そこに描かれる彼らは、しばしば傘をすばめるようにして持っている。

つまり、雨の日に狭い路地で傘を差す人同士が出会っても、一方もしくは双方が傘をす

ばめればいいだけで傾ける必要はない。

さらに、江戸の路地で「傘かしげ」を行うには別の問題もある。

江戸の商家や職人の家は、長屋でも一戸建てでも、道に面したところに開け広げの土間を作り、そこを店頭や作業場、調理場などに用いるのが常だった。

つまり、路地で「傘かしげ」をやると、すれ違う相手の代わりに人の家の中に水をぶちまけるおそれがあったのである。

「傘かしげ」は、実際の江戸の生活では実用性がない上、傍迷惑になりかねないしぐさだったということになるだろう。

威嚇しあう「肩引き」

「江戸しぐさ」では、雨の日の「傘かしげ」以外にも、「肩引き」「蟹歩き」など狭い路地ですれちがうための作法が挙げられている。「肩引き」とは次のようなも



歌川広重『名所江戸百景』中の「大はしあたけの夕立」より。左下に、和傘をすぼめて歩く人物が描かれている。

のである。

狭い道路や路地、またはこみ合う道路で、前方から人がきたとき、お互いに右肩を引いて、体全体を斜めにし、胸と胸を合わせる格好ですれ違うしぐさ。こころは「傘かしげ」と同じだ。右腕も自然に引く形になり、江戸っ子同士なら「いつくしみのしぐさ」をかわしつつ、見知らぬ人へも敵意がないことを「肩引き」のしぐさで表現していた

（『商人道』九四～九五頁）

「NPO法人江戸しぐさ」では、『よみがえれ！江戸しぐさ』という学校教材用動画を制作している。

その中には、男性二人による「肩引き」の実演も収められているのだが、体を斜めにし、目配せしながらすれ違うさまは、威嚇し合っているようにしか見えないのだ。

江戸しぐさ講師は女性が多いので、市民講座などでの実演は優雅に見えるのだろうが、大の男がやると「敵意がないこと」を示すどころか、いわゆる「ガンをつけた」ようになってしまうのである。

海軍式の「蟹歩き」

また、「蟹歩き」は次のようなものである。

辺しか歩けないような道ですれ違うときには、互いにカニのように横歩きすること。

一見、ユーモラスなしぐさだが、とてもつつしみ深い「往来しぐさ」だ。聞くところ、

まだ、江戸教育のよさを知っていた先生が残っていた戦前の小学校では、雨の日、体育館で児童たちに「蟹歩き」の練習をさせていたそうだ。

（『商人道』九七〜九八頁）

まず、教師が「蟹歩き」を小学校の体育館でおおっぴらに練習させていたというのは、「江戸しぐさ」は秘伝だったという話と矛盾している。

また、「聞くところ」というが、越川氏はいったい誰から戦前の小学校の話を聞いたのか。それは「蟹歩き」を「江戸しぐさ」の一つとみなしている人物、つまりは芝と考えるのが妥当だろう。

芝の小学生時代がいつごろか、芝の生年には幾つか説があるが、私は一九三四年四月か

ら一九四一年三月までとみなしている。また、当時、芝は東京ではなく横浜に住んでいた（いずれも第四章参照）。

つまり、「蟹歩き」を小学校で練習していたというのは、一九三〇年代の横浜の小学校で
のことと考えてよいだろう。

「傘かしげ」「肩引き」「蟹歩き」は、いずれも狭い道を二人以上が同時に通り抜けること
を前提とする動作である。

しかし、私個人についていえば、狭い道で行きあう時にはいったん立ち止まり、挨拶し
て道を譲り合う。あるいはどちらかが先に立ち止まって相手に道を譲り、譲られた方はお
礼を言うなり会釈するなりして感謝を示す（もちろん譲る側は体を斜めに引くわけだが、無理
に自分も歩き出そうとはしない）。

なぜ、「江戸しぐさ」では同時に進むことにこだわるのだろうか。

私には、これらのしぐさの背景には、狭い通路で相手に道を譲る、あるいは相手から譲
られることを受け入れるだけの余裕がない状況があるように思われる。

明治三十九年（一九〇六）に出された『各個教練歩哨及斥候勤務教授法』（海軍砲術練習所

編」という海軍兵士訓練用の教本には、「横歩」という項目がある。それは、「右（左）足を運ぶ時、膝を屈することなくまた左（右）踵を打つごとく行進せしむ」訓練だという。つまりは蟹のような横歩きである。

海軍では、艦船の狭い通路を複数の兵士が動く必要から、体を横にしてすれちがう訓練は必須だった。太平洋戦争開戦前夜の世相において、軍港横須賀に近い横浜の小学校で軍事演習まがいの授業があったとしてもおかしくはない。「蟹歩き」の起源が海軍の教練内容にある可能性は高い。

さらにいえば、狭い通路で同時にすりぬけたがる「江戸しぐさ」そのものが、海軍演習的な発想の延長線上にあるとみてよさそうである。

電車が走る江戸の街

これも代表的な「江戸しぐさ」とされる「こぶし腰浮かせ」については、次のような解説がなされている。

川の渡し場で、乗合舟の客たちが舟の出るのを待っているとき、あとから乗ってきた

新しい客のために、腰かけている先客の2、3人は、腰の両側にこぶしをついて、（あるいはこぶし分）軽く腰を浮かせ、少しずつ幅を詰めながら、一人分の空間をつくる。：現在、電車やバスでこんなしぐさを見るのはまれになった

『商人道』九八頁

まず最初に言っておかねばならないのだが、浮世絵や名所図会などからうかがえる江戸時代の渡し船には、座席にあたる構造がない。

乗客は、腰かけることなく船の底板にしゃがむようにして座っている。また、大きな荷物や荷物をくくりつけたままの馬が同じ底板の上に乗っていることもある。

江戸時代の川柳には「渡し船 馬の小便 一大事」というのがある。

逃げ場がない狭い船で、一緒に乗っている馬が小便を始めたら、落ち着いて座っているとではないだろう。渡し船は人を乗せるのに特化したものではなく、むしろ人も馬や物と同様の貨物として運ぶ船だったと考えた方がいい。

このような渡し船で後から来た人のために座る場所を作るなら、腰を軽く浮かせるよう



溪斎英泉が描いた天保期の蕨宿。渡し船には人も馬も一緒に乗り込んでいる。もちろん座席などはない。

な小さい動作ではなく、いったん腰を上げた方がいいだろう。

「こぶし腰浮かせ」は、それこそ現代のバスや電車のように長い座席がついた乗り物からしか生まれない発想である。

そのため、越川禮子監修『図説暮らしとしきたりが見えてくる江戸しぐさ』では、江戸時代の渡し船のイラストと言いながら、実際にはない横長の座席を書き込んでいる。

また、文部科学省『私たちの道徳 小学校5・6年』の「江戸しぐさ」解説ページのイラストでは、茶店の縁台と思しきものに二人座っているところにもう一人がやってきたので席をつめる様子が描かれている。

が、そこには湯呑や茶菓子の皿を置くために当然縁台の上にあるはずの盆がない。



歌川広重『東海道五拾三次』より。丸子の茶屋で、名物のとろろ汁を食べている。縁台には荷物も置かれており、くつろいでいるため座り方も決して行儀が良いとは言えない。

そのため、そのイラストでは客が湯呑を手にとって、縁台に一人でも多く座らせるために席をつめる、という行動をとっている。これは、茶店の縁台はただ座ればいいという空間ではなく、くつろぐための空間でもあることを忘れた（或いは知らない）人の発想である。「NPO法人江戸しぐさ」作成の教材用動画では、「こぶし腰浮かせ」の実技を、底に畳を敷き屋根がついた構造の船で正座して行っている。それは渡し船ではなく屋形船である。畳がなく正座に不向きな渡し船で同じ実技を見せるのは難しそうである。

さて、江戸時代の渡し船は一般に川の兩岸の渡し場を往復するものである。また、幕末の作ではあるが隅田川の船着場での人々を描いた『乗合船恵方萬歳』（のりあいふねえ ほうまんざい）（慶応二年＝一八六六）初演。初演時は人形所作事、後に舞踊化）で見られるように、船に乗る人は船着場に集まり、出発直前に船頭の合図で一斉に船に乗るものだった。

つまり、渡し船で中途から新たな乗客が乗ることは通常ありえない。これでは、江戸時代の人がいかに「こぶし腰浮かせ」を習得しても実際に使う機会はまずなかっただろう。

江戸時代の例も挙げられない「仁王しぐさ」

現代の公共交通と密接に結びついている「江戸しぐさ」には「仁王しぐさ」と呼ばれるものもある。ただし、これは忌避^{きひ}すべきとされているしぐさである。

人の前をさえぎり、仁王のように不動の姿勢を見せて立つこと。人間は仏さまをまつ寺院の山門でにらみをきかす仁王ではない。仁王立ちなどしたら人間同士の摩擦を増すだけだから、注意しようと互いに確認し合った。地下鉄や電車で、次の駅で降りるわけでもないのに入り口付近で大きなカバンをかついだまま、ひじを張って乗り降りを妨げている人が増えている。互いに狭い空間を共有しているのだから、周囲に気をくばり、迷惑をかけず、気持ちよくいきたい。後ろに待つ人のことを考え、目的地までの値段を調べてから、駅の自動切符売り場では切符を買うのが常識というもの。あとに並んで待つ人さまにおかまいなく、自販機の前に仁王立ちになって“さて、いくらかな？”と値段表を調べて、ようやく財布を取り出す人。これは“仁王立ちしぐさ”というものだろう。

『商人道』一〇一〜一〇二頁

以上が典拠書籍における「仁王しぐさ」の解説全文である。現代人のマナー講座としては御説ごもつともだが、江戸時代には地下鉄も電車も駅の自動切符売り場もない。

どうやら、江戸時代において「仁王しぐさ」が迷惑になる状況というものを考え付かなかったようである。

身分社会で平等主義？

「江戸しぐさ」は平等と共生の哲学だといわれる。

厳しい身分制度に支えられた封建社会で平等思想が広まったというのも奇妙な話だが、その平等思想を示すものとして「江戸しぐさ」で語られるのが「尊異論」そんい「三脱の教え」さんだつである。

「尊異論」とは次のようなものである。

有能な番頭は顧客のニーズを数だけでなく質でとらえ、商品を仕入れた。たとえば「これが売れている」と小僧たちの十中八九が賛成しても、ユニークな小僧が「こっちのほうが売れる！」といった品物に番頭自身が共感したら、番頭はそちらを採用した。

つまり異なる意見を大切にした。尊異論を率先、実行したのである。

『商人道』一二二頁

少数意見の尊重は、民主主義を成り立たせる上での重大な要件である。「異なる意見を大切に」にする「尊意論」なるものはその考え方に通じるかに見える。

しかし、越川氏が挙げる例は、民主主義的決定のプロセスとはまったく相容れないものである。そもそも、少数意見の尊重とは、「多数決の原則を前提とした上で、少数といえども他の意見があるならその根拠を明らかにし、容れるべきものがあれば決定に反映させるべきだ」という考え方である。

越川氏が挙げる例では、番頭が自分の気に入らない意見は、たとえ小僧たちの多数意見であつても容れることなく、気に入った小僧一人の意見を採用するわけだから、少数意見の尊重とは何の関係もない。

それどころか、自分が共感できなければ小僧の多数意見であつても採用しないという番頭の態度は、まったく「異なる意見を大切に」にしていけない見本ではないか。用例そのものが「尊異論」なるものの中身を否定しているのである。

ワンマンタイプの経営者や政治家が民主主義について語ろうとした時、まるで見当はず

れの意見を述べることがあるが、越川氏による「尊異論」の解説にはその典型を見るようである。

もちろん、江戸時代に民主主義の見本などあろうはずもない、と言ってしまえばそれまでなのだが、それならそれで別の疑問が生じる。

実際の江戸時代の商店で小僧と言えば、裏方の仕事ばかりで接客に回されることはなく、自分で買物をできるだけのまとまった現金収入もない立場である。

そんな小僧たちは商品について、顧客の立場からの意見を聞いたり考えたりする機会はずなかつたであろう。番頭が仕入れに当たり、店主に相談して指示を得るのは当然としても、小僧の意見を聞くいわれはない。

つまるところ、越川氏が説く「尊異論」なるものは、現代の民主主義社会の規範にしろ、江戸時代の社会の現実にしろ、どちらにあてはめようとしてもちぐはぐになってしまうようなしろものなのである。

「三脱の教え」は身分社会では不要

次に「三脱の教え」について検討しよう。

“江戸しぐさ”では、初対面の人医に年齢、職業、地位を聞かないルール、触れてはいけないしきたりだった。江戸幕府は士農工商という身分制度をしいていたが、江戸後期になると、経済力の差から、武家の権威が落ち、あまり身分制度を意識しない傾向が出てくる。三脱の教えはこうした背景の中で生まれた。(…)講などで初対面のときにも、けっして年齢や職業、地位を聞くことはなかった。しぐさの特徴で仮の呼び名(綽名という、今のニックネーム)で呼んだ。現代では、肩書、権威、地位で人物を評価する傾向が強い気がする。

(『商人道』五六頁)

全員が綽名^{あだな}で呼び合うというのは、江戸時代の講というより現代のオフ会のような光景である。

それはさておき、江戸時代の人にとって年齢、職業、身分などはわざわざ聞くまでもなければ、聞くことを禁止するルールを作るのも意味がないことだった。なぜなら、服装や髪形でその三つはだいたいうかがえたからである。それが身分社会というものだ。

江戸時代、幕府は幾度も奢侈禁止令(奢侈とは贅沢のこと)にあたるお触れを出している。

江戸時代には商品経済の発展で、農民や武士も衣類などの出費がかさむようになった。それを放置すれば、貧窮化から社会不安を招きかねないというので、儉約を奨励したわけである。

その際、衣類や装飾品について贅沢か否かの基準になったのは、その品が身分相応がどうかだった。つまりは江戸時代というのは、身分相応の格好をしていないとお上からならまれる時代だったわけである。

ちなみに、江戸時代の奢侈禁止令でもっとも大規模だったのは江戸後期、天保一二年（一八四二）五月から同一四年閏九月までのいわゆる天保の改革である。

「尊異論」「三脱の教え」は、平等思想が当然のものとなった民主主義社会での常識の産物である。身分社会・封建社会だった江戸時代には、そうした考え方は非常識であって処世訓としても役に立たなかっただろう。

なお、豊後国日田郡ぶんご（現大分県日田市）の学者・広瀬淡窓ひろせ たんそう（一七八二～一八五六）が開いた私塾・咸宜園かんぎのスローガン「三奪」（身分・出身・年齢を問わず平等に学ぶ）を、この「三脱の教え」と結びつける説もある（『江戸しぐさ事典』等）。

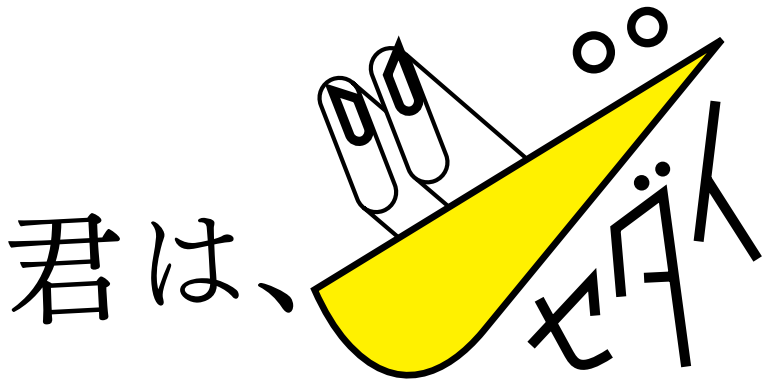
しかし、「三奪」は、塾内では外の身分社会とは別の秩序を作るという宣言であり、外の身分制度を根本から否定しているわけではない。そういった意味でも、「三脱の教え」とは相いれないもののなのである。

仮に「江戸しぐさ」が淡窓の思想を参考にしていても、両者は別物とみなすべきだろう。

「江戸しぐさ」は盛んに江戸時代を称揚するが、それらはいずれも現代的な常識に彩られたものとしてである。

しかし、今とは異なる論理で動いていた江戸時代の良さというものは、やはり現代の常識では計りきれないところにあると考えるべきである。

つまり、現代人の常識を江戸時代に求めようとする人は結局、江戸時代の良さもわかっていないのである。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ **イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、
未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。
各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!